

## 市場縮小のピンチが一大転機に

母体となったのは、建設会社の出雲土建(株)。平成3年から同社の代表を務め、平成12年、その子会社『西日本工業(株)』(出雲カーボンの前身)の代表取締役に就任した石飛氏。「平成10年頃でしょうか、建設業はこれから急速に市場が収縮する産業だと言われ始めました。平成4年に84兆円だった建設名目投資が平成20年頃には4割減の50兆円になり、利益率もグンと下がるだろうというのです」

かつてない危機感を覚えた石飛社長は建設業のあるべき姿を見つめ直し、「技術力を高める／いい仕事をする／財務体质をよくする」という3大テーマを掲げ、生き残りへの体质改善に着手した。しかし「本当に建設業だけでやっていけるのか」という不安は強くなるばかり。少しでも体力のあるうちに新事業に取り組もうと考えたが、ゼロから何を始めればよいのか。「当時、将来伸びるのは健康・環境・福祉だろうと言われていました。それなら、この3つの中から選ぼう、建設業と重なる部分があるのは環境分野ではないか、という結論に至ったのです」

それからは猛勉強の日々。環境関連の専門誌をひたすら読みまくった。そして平成12年3月、知識が実践へと前進する。「建設リサイクル法の説明会に出席したのですが、そのときのテーマが『廃木材のリサイクル』。『半径50km以内にリサイクルの施設がある場合、焼却炉があっても焼却せず、その施設で処理せよ』という法律が2年後から施行される』という説明を聞いて、ひらめくものがありました。当時の島根県内には、コンクリートやアスファルトの廃棄物をリサイクルする施設はありましたが、廃木材のリサイクル施設はなく、鳥取県の米子まで運んでいたのです。半径50kmなら、県の主要部である松江も出雲もカバーできるので市場もある。業界紙等にも、産業廃棄物処理は伸びる産業だと書かれている。やるならいまだと、木材のリサイクル事業に新参入する決断をしました」

## 目指したのは工業品化された“本物の炭”

その年、平成12年の夏から、廃木材処理施設を視察するための全国行脚が始まった。2年をかけて、およそ200日。その視察の中で、廃木材から炭をつくる現在の“炭化技術”が、想像以上にハイレベルであることを知る。「いろいろ調べてみると、炭には調湿効果や消臭効果など素晴らしい特性がありました。しかし、当時、なぜか『炭』が、大きなビジネスになっていませんでした」

建設業の鋭い視点が、家と炭とを結び付けた。「日本の気候では、家屋の床下の湿気対策が不可欠です。そこに木炭の除湿機能をうまく活かせば、売れないはずはない」と確信しました。

早速、製品化へ向け、独自のアプローチで炭の研究に着手。その際、自らにテーマを課した。「効果を見せる／製品を規格化する／販売ルートを確立する」、の3つである。「床下の炭の効果は見えにくいので、見えるようにしようとデータ化ですね。これを産学共同研究で進めようと考え、島根大学にご協力いただき、炭の物性を徹底的に調べました」

### Winning Shot

「炭をやっている人は皆さん熱く語る。炭は人を狂わせる。そんな魅力があるんです」と笑う石飛社長。

「プラントには約6億円を投資。炭を作るためだけに、周りからは見られましたね」

# 逆風を新事業のチャンスに、廃木材リサイクルから環境ビジネスを創出。



石飛 裕司氏

代表取締役

出雲カーボン株式会社

代表者／代表取締役 石飛 裕司氏

創業／平成13年

所在地／島根県出雲市下古志町1819-121

<http://www.sumi8.jp>

事業の柱は、家屋の床下や天井で湿度を調整する木炭『炭八』の製造・販売。もともとは、建物の解体で発生する廃木材のリサイクル事業を目指していたが、産学連携の取り組みなどにより、本格的なビジネスへと成長させた。

その綿密なデータは、製品となる炭の“規格化”に生かされた。「単なる廃木材のリサイクル品ではなく工業製品としての品質を追求しました。安定的に効能を謳える炭を作るため原料を選び、ISO9001も取得して品質管理を徹底したのです」

平成14年1月に炭を焼き始めると、データの収集・分析が繰り返され、6月にはついに自社ブランドの『炭八』が完成。最後の課題は、販売ルートの確立だった。

「炭を扱う他社の多くがホームセンターやインターネットで販売する中で、私が着目したのは建材ルートです。施工を考えると建材店や工務店からの販売がベストだと直感しました」

そこで、建材店を通じて地元のお客さま336軒に無料で提供するという、大胆なプロモーションを仕掛ける。狙い通り、「話題性と口コミ」で知名度が高まった。その間、炭を入れる袋に改良を加え、床下の湿気対策に最も適した炭の粒の大きさと袋の素材との組み合わせによって特許も取得。平成14年9月、石飛社長が手塩にかけた『炭八』の正式発売が始まった。現在では出雲市の7～8軒に1軒が使うまでに普及。島根県内の建材店が参加する『炭八の会』、工務店による『炭八しまねの会』も整い、産学連携では『アトピー性皮膚炎や小児気管支喘息との関係』なども発表されている。『産学連携による、健康住宅造りに寄与する建設廃木材を活用した“調湿木炭”的研究・開発』によって、第2回ニッポン新事業創出大賞アントレプレナー部門の優秀賞にも輝いた。

「現在、炭の持つ断熱効果や防音効果に関する研究も成果が得られ、マンション用の商品化も進んでいます」

販売の8割が県内という『炭八』が、次々とデータの裏付けを得て、いよいよ全国市場へ打って出る。